The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	台湾集集大地震における救援活動の記録
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	ΣYN : ボランティア人間科学紀要. 2003, 4(2), p. 189-206
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2906
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ΣYN（ボランティア人間科学紀要）第４号（2）（2003年）別刷
Ｓｙｎ　(The Bulletin of Volunteer Studies)　Vol. 4（2）(2003)

台湾集集大地震における救援活動の記録

渥　美　公　秀

2003年11月

大阪大学大学院人間科学研究科
ボランティア人間科学講座
Research Center for Civil Society
Graduate School of Human Sciences
OSAKA UNIVERSITY

台湾集集大地震における救援活動の記録

渥　美　公　秀
（地域共生論）

要　約

日本災害救援ボランティアネットワークは、1999年９月21日に発生した台湾集集大地震に対して救援活動を展開した。具体的には、震災直後、１週間後、１年後に救援調査チームを現地に派遣した。筆者は、いずれのチームにも参加し、救援活動の様子を記録した。本稿では、その時々に現地で記したフィールドノーツを再構成し、救援活動の前後の様子を加筆して、災害NPOの救援活動の実態を紹介した。阪神・淡路大震災以来、NVNADが展開してきた救援活動が、台湾集集大地震での活動を通して、一人ひとりの被災者の気持ちに深く配慮した活動へと質的に変化していった様子が確認できた。

キーワード：台湾集集大地震、災害救援、災害NPO、フィールドノーツ、ボランティア

阪神・淡路大震災から８年以上の年月が流れた。筆者は、災害救援活動に関心をもつ研究者として、（特）日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)のメンバーとして、そして、震災の被災者の一人として、幾度となく災害救援の現場に赴いた。特に最初の５年間は毎年のように災害救援活動に関わった。震災の翌年には、インドネシアのイリアン・ジャヤで地震と津波の被害を受けた村を訪れた。1997年には日本海重油流出事故の後方支援の場にあった。続いて、1998年の南東北・北関東豪雨災害の際には、栃木県那須町の水害ボランティアセンターを訪れ、情報発信のお手伝いをした。1999年には、台湾大震災の救援活動に発災当日から参加し、復興活動に至るまで関わってきている。2000年には、鳥取県西部地震が発生した。その際には、現地に駆けつけて、被災地外からのボランティアの参加が必要かどうかということについて聞き取りを行った。

筆者は、災害救援活動に参加した経験や記録をもとに、機会がある毎に、災害とボランティアについて理論的な考察を深めてきた（例えば、渥美, 2001）。例えば、震災からは、集合的即興ゲームを着想した。重油流出事故での経験をもとに、ボランティアの「実力」について考察した。水害の現場からは情報について、台湾からはボランティアの動機について、鳥取からは地域社会とボランティアについて、それぞれに理論的な考察を加えるように努めてきた。また、筆者には、震災を契機に設立されたNVNADが、災害NPOの１つとして、着実に経験を積んでいった経緯をエスノグラフィーにまとめる機会もあった。

ところが、これまで、特定の救援活動を詳細に書き記す機会にはあまり恵まれなかった。というのも、限られた紙幅ならば、研究者の使命として、現場の光景や経験を一歩抽象化して理論的な言説を紡ぎ出すことに重きを置くことになるからである。また、エスノグラフィーを書く時もそれは決して事実経過なるものを綴るのではなく、理論的な視座を確保して書いていくものであると考えるからである。一方、特定の救援活動を詳細に書くとは言っても、それがエスノグラフィーを書く

ための原材料として、書いた本人だけがわかるようなメモの羅列であったりすると、仮にそれを書き記しても意味をなさない場合があろう。このような事情から、エスノグラフィーや理論的言説の背後にあった救援活動の詳細を記した記録については、公開の機会があまりなかった。

そこで、本稿では、エスノグラフィーや理論的言説を記すのではなく、日頃あまり公開の機会のなかったフィールドノーツの一端を研究ノートとして提示したいと思う。フィールドノーツを提示することで、フィールドワークの現場を体感してもらうと同時に、フィールドワークの現場から、エスノグラフィーや理論的言説を紡ぎ出していく際の途中経過を知ってもらえれば幸いである。

本稿で紹介しようとするのは、台湾集集大地震の救援活動に参加したときのフィールドノーツを再構成したものである。フィールドノーツという言葉の使い方にも諸説（例えば、Emerson, Fretz, & Shaw (1995)や佐藤(2002)を参照）あるようだが、ここでは、救援現場でのメモを集約し、（NVNADのホームページでの）公開を念頭に整理したものを指している。本稿では、これらのフィールドノーツをもとに、当時は団体としては公開しなかった個人的な挿話などを交えて再構成した。なお、登場人物や団体名は、当時の担当者等に連絡を取って掲載の許可を得ることが難しい場合があったので、全て略号を用いた。

第１節　発災（1999年９月21日）から第１次先遣隊報告まで

まだ夜型の生活をしていた頃、眠い目をこすりこすり朝食を摂っていた。食事中にはテレビ番組を見ない。しかしその日は、既に食事を終えた家族がテレビを見ていた。一番遅く起き出してきた自分が、テレビを消してくれとはいいにくかった。ふと画面を見ると、震災の映像が映っていた。夜の暗闇の中、投光器の光を浴びてオレンジ色の重機が、生き埋めになってしまった人々を一人でも多く救い出そうと、倒壊した建物と格闘している。何かがおかしい。映像に見える人々が夏服を着ている。私にとって震災は、寒い朝のことのはず。目を凝らして表情を見ると私たちとよく似ている。重機の手前に「吉野屋」の看板も見える。夏、夜、日本、震災・・・混乱した頭でこの“季節はずれの”震災を眺めていた。私が眠りについた頃、台湾で大規模な地震が発生し、とんでもなく大きな被害が出ていたということを理解するまでに、随分と時間がかかった。妙に胸騒ぎがした。しかし、午前、午後の予定はびっしりと詰まっていた。とりあえず研究室に向かった。自分の席についたが、何とも落ち着かない。台湾との外交関係、日本政府からの救援体制、その2ヶ月前に台北で開かれたアジア社会心理学会の時の記憶、そして、震災後の西宮の風と香り。受話器を取り上げた。団体Ａに電話をした。「午後４時の飛行機で出発」との緊迫した声。思わず「われわれも行きます」と応えていた。航空券の手配を団体Ａにお願いし、仕事関係の連絡を一通り済ませて、一度自宅に戻った。家族は外出中。そこで、机の上に「台湾へ行ってきます」と書き置きをして、大急ぎで関西国際空港へ向かった。数時間後、日本災害救援ボランティアネットワークの代表と一緒に、震災当日の台北で、団体Ａのメンバーとレスキュー犬による必死の捜索活動を眺めていた。

第１次先遣隊報告という形式をとったフィールドノーツ

【台湾】9.21先遣隊報告

派遣目的：人命救助の補助（団体Ａとともに）現地情報収集、ボランティア団体の活動状況調査、コンタクトパーソンとの接触・交渉

【9/21：台北市】

＜活動の概要＞

・団体Ａとともに活動。状況の日本語・英語での通訳として活動を補助。

・現地情報収集：台北市に限っていえば、被害はゼロではないが、被災地には見えない。ほとんど被害がない。市民の生活も平常通り。ネオンも各地で健在。台北縣では被害が出ている。

・ボランティア団体の活動状況調査：救出作業に携わる人々への飲食サービスが行われている。団体B100人以上。

・コンタクトパーソンとの接触・交渉：NVNADメンバーの友人から協力もらえることに。

＜詳細報告＞

16:25 日本アジア航空EG237便にて台北へ

団体Ａ：Ａ氏、Ｂ氏、Ｃ氏、レスキュー犬：Ｄ、Ｅ、Ｆ

NVNAD：Ｇ氏、渥美

台湾政府からの出迎えでスムーズに入国。

13:00 現在の情報として、台北市内の松山ホテルに生存者ありとのこと。

内政部消防署災害預防組　Ｈ氏とともに、台北市の松山ホテルへ。車には後部座席用に大画面のＴＶがついていて、ＴＶ映像として被災地の状況を確認することができた。ＴＶによれば、

19:10 1455人死亡、3732人負傷

19:25 1489人死亡、3823人負傷

不思議なことに、避難所という感じの場所は一切映らず。

車内でボランティアについて尋ねたが、そもそもボランティアという言葉が通じなかったようだ。返ってくる答えは、消防・警察・軍が何人出ているかというもの。

19:35 台北市の松山ホテル倒壊現場に到着

このエリアに入る手前で一般車両進入禁止となる。われわれは、Ｈさんの説明ですんなり通過。

エリア内に入ると、200mぐらい先の正面に倒壊したビルと重機が投光器に映し出されている。途中、消防車やパトカーがたくさん停まり、ＴＶの衛星中継の車も見える。その間にたくさんの憲兵が立ち、身分を告げないと先に進めない。厳戒体制である。

写真１：台北市の倒壊したビルで続く救援作業

倒壊した松山ホテルは、12建てのビルの11，12階をホテルとして使っていたようだ。以下の階は、アパートや事務所とのこと。８階あたりまで完全に倒壊しているので低い

ビルに見える。隣には吉野屋。その隣には同様のホテルらしきもの。

倒壊したビルの被害がよくわからない。3人死亡、106人救助、20～30人が閉じこめられているとの情報がある。一方で、あと7人が生きているという情報もある。

ビルは、最上階から煙が吹き上げ、消火作業も同時に行われていた。周囲は、なんら被害がない。電気が来ていない程度。松山ホテルの入ったビルだけが壊れていた。

現地の台北市警察の人に聞くと、台北警察もラブラドール4頭をもっているとのこと。日本語が通じる人もいる。

エリア入り口付近に、志工（volunteer）のテントがあった。団体Bである。ブルーのポロシャツに白いズボン。ベストのような服装をしているVもいる。皆、名札(ID)をつけている。英語の通じる人を探して話を聞いた。救出作業に携わる人々に食べ物と飲み物を出しているとのこと。

現場には多数のマスメディア。台湾、香港、日本の各社などなど。台湾に来る飛行機で一緒だったI放送、シンガポール支局から応援にきたJ社などと一緒にいることが多い。取材の申し込みがあれば、できるだけ受け、団体Aが取材されているときに日本語が通じにくくなって英語になったときは通訳をした。

写真2：団体Bのボランティアから活動の流れを聴く

20:00　K電視台（台北）のインタビューに渥美が日本語で答える。

20:10　8階から下に生存者がいるかもしれないとの情報。

20:20　L電視台上海支局のインタビューにG氏が日本語で答える。

20:30　アメリカのNGOのベストを着た人を見かける。インタビューできず。

20:35　レスキュー犬、建物の10階に入って捜索。われわれは、少し離れたところから見学。メディアとの接触も増えた。

20:55　香港のケーブルTVから英語でインタビュー。渥美が英語で答える。団体Aの立場、なぜ来たのか、神戸の震災と関係があるかといった質問に答える。

21:00　救助に入っているB氏、C氏と犬をもう1頭呼ぶ。

21:30頃　NVNADメンバーの友人（台北在住）にやっと電話ができた。無事を確認した後、いくつかの調べものをお願いした。快く引き受けて下さった。

（1）日本人滞在者で作っている会の連絡先

（2）現地日本企業でボランティア活動に関心が高い可能性があるところの名前と連絡先

（3）政府の窓口

（4）現地でのNGO・NPOについて

（5）台湾大学に関連する人々

いずれも、今後、日本からボランティア等が訪れた場合に有用。NVNADとしても、今後の救援の窓口を探りたいとの思い。

21:40　6Ｆから助けを求める声があったと医者が言っているという噂。

21:50　団体Ａ、10Fの捜索打ち切り。

犬は反応したが、反応が弱かった。念のために台湾のレスキュー隊（消防）4，5人が入ったとのこと。火事で焦げている部分。

21:55　団体Ｂの出しているテーブルから水をもらう。

22:00　団体Ａの第２回目の捜索、対象は９階。団体Ｂの人に話を少し聞きに行く機会があった。この現場では、10ほどのチームを組んで、交代で出て（ちなみにこのときの人々は、19:40に来て、翌朝まで）活動するという。活動内容としては、2，3カ所に設けられた机に飲み物や食事をおいたり、持ち回って現場で働く消防署員などに配っている。約100人が現場にいる。本部テントの黒板には、各方面の被災状況らしきものが掲げてあった。こちらからは、日本からボランティアがやってきたときに、窓口になってくれるかどうかを打診。まだ緊急期であるから、詳細は打ち合わせできない。公式には、「まず、政府に届け出ること。政府に登録すること。政府に活動場所を割り振ってもらうこと」ということ。

22:30　犬が動けないほどの瓦礫の山であり、火災による煙が多く、建物も危険。

23:00　現地対策本部のように使っている場所（たぶん、小さなレストラン）で、団体Ｂが配っている夕食（ご飯の上に炒め物を乗せたものとスープ）を食べた。各社の取材に協力。通訳なども行う。日本のメディアからは、われわれが携帯電話をもっていないかと何度も問い合わせがある。明日、どこへ行くのか知りたいとのこと。明日の行き先はこの時点で決まらず。こちらとしては台中へ行きたいと思うが、行き先は政府が決める。24:00近くになって台中にいくと告げられた。

24:00　現場を離れた。この時点で1,700人の死亡が確認されていた。現場から、台北駅近くのホテルまで、消防の車で赤色ライトを回しながら走った。

写真３：団体Ｂが救援作業にあたる人たちに提供した食事

＜メモ＞

政府受け入れは、いきなり主要人物に会えるし、捜索の核心に迫ることができるが、現段階では、民間との接触や移動に制限が出てしまうこともあろうかと思う。

翌日、ようやく震源地に近く、被害の大きい南投県への移動が認められた。決してスムーズとは言えないコーディネートだった。被害の大きかった街に着いたときには、夕闇が迫っていた。夜に暗闇の中、懐中電灯の灯りを頼りに、救命活動が展開する。倒壊した家。顔立ちは似ているが、言葉の違う人たちが救援にあたっている。

第１次先遣隊の２日目のフィールドノーツ

【台湾】9.22 先遣隊報告

【9/22：南投県】

＜活動の概要＞

・団体Ａとともに活動。連絡調整、通訳として活動を補助。

・現地情報収集：見えた範囲に限定すれば、台中市の被害はほとんどないと言えそう。台中縣ではかなり被害が出ている。南投縣に入るとかなりの被害。どこからどこまでがいわゆる市内か確認できないが、救助作業を行った郷ではあちらこちらで建物が完全に倒壊している。

・ボランティア団体の活動状況調査：南投縣立総合体育場や、救出作業を行ったエリアでも、団体Ｂが組織だって活動している。炊き出し、電話、マッサージなど。他に退役軍人の会がボランティアを受け付けている。現場は救援物資の搬入搬出が続く。その量はかなり多く、「この段階で、こんなに物資が集まるとはすごい」とは、日本政府の救助隊員の声。

・コンタクトパーソンとの接触・交渉：NVNAD メンバーの友人（台北）、知り合いの人・企業・団体（台中）とコンタクトをとっている。台中ではボランティアの受入にもご協力頂ける可能性があるが、まだ未定。

＜詳細報告＞

7：00　ホテルで朝食　団体Ａは、すでに犬の散歩を済ませている。

8：00　Ｈさんから電話。出発が８：45 になるとのこと。

9：05　台湾政府新聞局のＭ氏がホテルで待っているわれわれにコンタクト。英語ができる。昨日来てくれているとは知らなかったのでお世話できなかった、台北に戻ることがあれば連絡がほしいとのこと。

9：10　近くのセブンイレブンで新聞を全紙購入。団体Ａの活動も取り上げられていた。

9：25　まだ政府の車が到着しない。ロビーにいると香港のメディアがコンタクト。英語によるインタビューだったので、渥美が対応。

10：00　政府の車がまだ来ない。１分１秒をあらそう作業なのに・・・苛立つが、考えてみれば、震災２日目。１月 18 日に何ができたか・・・

10：15　ドイツのメディアがコンタクト。団体Ａの立場で英語でインタビュー。

10：40　ようやく政府の車、到着。車は大きくないといけないが、十分なサイズの車であった。これは、台北市消防署の車であった。

10：42　ドイツのメディアが興味をもったらしく。別の車で同行することに。出発直前に、今度はＴＶカメラの前に立たされて、英語インタビューだった。内容は、先に述べたことの要約版。

10：45　出発。行き先は、南投市。

14：50　台中市に入った。市内で車の通過できる範囲では、ほとんど何も壊れていない。少しヒビが入っている程度。

15：25　南投市に向かう途中、Ｎ會の垂れ幕をつけた車を２台目撃。9・21地震急難救済と書かれている。救援物資を運んでいる様子。

15：30　南投市に入った。緊急車両が多くなる。しかし、車から見る限り、まだ被害はあまり見えない。

16：00　南投縣立体育場に到着。ここは、災害対策本部の機能を果たしている模様。スタジアムのような建物で、内部（グランド）からヘリが飛び立っている。スタジアム前の広場には、救援物資が山積みにされ、様々な人々（軍、ボランティア、ドクター、ナース、退役軍人、行政など）とそのテント、それぞれの車などがある。詳しく見ると、建物の被害を届け出るところ、人的被害を届け出るところ、退役軍人が開いているボランティアの申し込み受付所、ボランティア団体（例の団体Ｂ、Ｏ社など）の炊き出しテント、電話を並べたところ、などなど。団体Ｂと軍が一緒に物資の搬入・整理・搬出をしていた。現地では、ボランティアは、物資搬入などの人手として動ける程度か。

16：10　団体Ｂのテントに行き、「美國語？」とメモ用紙に書いて見せたら、英語の話せる人が出てきて、日本語の話せる人がいるからと別のテントに案内してくれた。紹介された女性は、針・マッサージの先生でお茶屋を経営していてライオンズなどの会員という快活な方。お父さんから日本語を学んだという。ほぼ通じる。日本からボランティアが来たら一緒に活動できるかと問うと、「もちろん。私も台北（よそ）から来た。気持ちがうれしい」とのこと。名刺を交換して、いったん車にもどった。

写真４：団体Ｂのテント

16：50　「なぜまだ出発しないのか！」とやきもきするが、時間があるというので、Ｇさんと先ほどの団体Ｂの人にさらに話を聞きに行った。「ありがとう。まずは、マッサージをしてあげましょう」と言われ、「いやいや、そんな場合では・・・」と思いつつ、マッサージをしてもらいながら話を聞いた。ふとテントの外を見ると、日本政府からの救援隊が体育場前に到着。隊列を組んで歩いていた。「日

本からのボランティアも受け付けるだろう」「避難所は公園や学校で、たくさんの人がいる（われわれは、この時点では、まだ一度も避難所を見ていなかった）」「花蓮には、団体Bの大きな病院がある」「この人たちは、ボランティアが好きで、東奔西走している」「外国からの支援はうれしい」などなど。最後に、ネパールに行った時に採水したという霊水（たくさんの僧侶が拝んでいる前を流れていた水）をかけてくれた。妙に嬉しい気分。

17：05　退役軍人のボランティア受付に行く。日本からボランティアが来ると受け付けてくれるのかと漢字筆談。答えはOK。ただし、短期的に活動しているからとのこと。「市政府？」と尋ねると、退役軍人とのこと（ここで、初めて退役軍人とわかった）。赤いベストを着た人々。ちなみに、義工（イーコン）＝志工＝ボランティア＜要確認＞。

17：10　ようやく救援現場にむけて出発。朝からこの時間まで、待機が続いていたということ。今度は、日本の救援隊と一緒（大型観光バス）。

17：30頃　南投市は人口10数万。車の中で見ていたＴＶで、死者1864　負傷者4567、不明約2000という数字を知る。2000人もの人がいるのに・・・団体Ａの人々もやるせない様子。まだ生きている！との確信のもとにやってきただけに、政府の案内というスタイルは、救助活動にとって必要であるが、なかなかしんどいものだと痛感した。

17：40頃　車から、避難所らしきものを初めて見た。永和釣蝦場広場というところ。たくさんの人が仮設テントの下で食事など。隣は養鶏場。

17：50　電線が垂れていてバスが前に進めない。バスから日本の救援隊の４人がこちらの車に移動。東京消防庁２人、海上保安庁１人、福岡県警１人。聞いてみると、彼らは第３陣35名。第１陣30名程度、第２陣17名で来ているが、相互の連絡が取れないとのこと。

18：05　南投縣中寮に到着。政府の人が現地の人と話している。

18：10　この村では46人が死亡。しかし、もう行方不明者はいないとのこと。ドイツのメディアが、「あんた、カメラに向かって状況しゃべって」と言うので、渥美が英語で状況を説明。次の場所へ。

19：30　中寮郷永平路に到着。レスキュー始まる。ここにも団体Ｂの人々が。現場は悲惨。バスの入れる通りから少し入ったところ。片側に下の階が崩れた上に火がまわった場所があり、遺骨を集めて、線香をたいて供養している。その横は大きく傾いたビル。反対側にも下の階が壊れたマンション風の建物。ここに生存者がいる可能性があるという。地名は永平路312-＊＊。早速、レスキュー犬Ｆが入り、３つの部屋を探す。次々とＤとＥが入る。明確な反応はないが、２カ所怪しい。これはきっと２階部分であるが、道路とほぼ同じ高さまで１階が押しつぶされている。床に２カ所の穴を開けてそれまで捜索していた様子。床の断面がむき出しになっていたが、本来鉄骨・鉄筋が見えるべき部分に、灯油缶が埋め込まれているのが見える。Ｇ氏・渥美も中に入って、レスキューの

活動を見守る。連絡調整とビデオ撮影など。ドイツのメディアにも状況を説明。日本からの救援隊も作業に加わる。

20：18　崩れかかった建物で作業している時に、余震。皆、飛び出す。これは、正直言って怖かった。震えた。日本の救援隊の方針だと思うが、「10分経過したので」ということで、再び建物内に。

写真５：救出作業にあたる日本からの救急隊員

20：30　１つの部屋に日本の救援隊の人が集まっていた。現地の言葉で大きな声がしている。「今の話わかる人は？」と日本人の声。誰も反応しない。「英語のできる人は？」ということで、渥美が事情を聞く。話している現地の人は若い男性で英語もできる。中年のおばさんと一緒。聞いてみると、「このドアの奥か、この床の下あたりに、夫がいるはずです」とのこと。このおばさんのご主人である。Ａ氏とレスキュー犬が再確認。先ほど怪しい反応があったところだという。住民の証言と一致するので、日本の救援隊が救援作業に入る。床を破る機材がない。そこで、ドアの方から進むことに。

20：50　隣の部屋では、床下奥に遺体が見えるとの情報。見に行く。様々な機材で日本の救援隊が活動中。何か布きれのようなものが見えるがよくわからない。

21：10　車に戻り、犬３頭の番をする。車を停めたところの横には、Ｐ救援小組と書かれたところがあり、食べ物を配布している模様。何も食べていなかったが、特に欲しくない。

21：20　Ｂさんから、ドイツのクルーが引き揚げるとの連絡。渥美は同乗し、帰国の途に。

＜メモ＞

現場では日本語は通じることがある。英語はかなり有効。しかし、現地語ができないことがかなりもどかしい。

とにかくまだ人命救助の段階。

しかし、ボランティアを含めてかなり組織だった活動が見られる。

第１次先遣隊として現地を訪問したＧ氏と筆者との報告をもとに、帰国直後のNVNAD事務所でミーティングが開かれた。その席上、筆者が感想として述べたことは次の２点であった。

（１）現地では、団体Ｂをはじめとしてボランティアが実に組織だって活動している。救急救命期を過ぎた時点で、日本からのボランティアが必要かどうかを判断した方が良いが、ほぼ不要

であろうと思う。そこで、現時点では、NVNADとしてボランティアの募集は行わないことを提案する。

（2）現地の方々と連携しての活動を今後探りたい。具体的には、台湾人の知り合い、現地在住の日本人、現地の日本企業、現地の日本とつながりのある各種団体。NVNADとしては、そのすべてのカテゴリーにアクセスして、第2次隊を出して現地でそういった人々と会い、その上で、今後の長期的な救援プランについて、判断をするべきであろう。

こうした主張は受け入れられ、5日後に第2次隊が出発することになった。筆者は、これに加わり、再び台北に飛んだ。

第2節　第2次隊（9月28日～10月1日）

第2次隊は、9月28日から4日間の日程で再度台湾を訪問した。隊には、NVNADに問い合わせをしてきた方々の中から、現地の言葉のわかる2名にボランティアとして加わってもらった。

現地では、アメリカから調査のために台湾に入ったQ研究所と連携して現地のニーズを調べた。Q研究所のチーム構成は、技術者6名、地震学者6名、社会科学者6名で10月6日までの滞在。このメンバーの一人に、筆者の友人でNVNAD会員でもあるR氏が加わっていた。台北の空港で偶然に出会い、互いに協力して動くことにした。

第2次隊として現地からNVNADに送ったフィールドノーツ

【台湾】第2次隊現地報告

9月29日 9:00

日本から台湾に進出している日本企業S社を訪問し、総経理（社長）T氏及び副董事長U氏から現状説明を受ける。この訪問でS社から、地震に関する現地情報を定期的にNVNADに提供していただくこととなった。S社としての被災者支援としては以下のような内容。

★輸液9000本＋4300本を提供。点滴セット10000セットも提供。

★捕里（地震の震源地と言われているところ）の病院に継続支援

★震災で1日休業したので、従業員の給料の1/30を寄付し、さらに会社からの寄付も行った。合計100万NT＄。これは内政省に27日に送った。

★被災社員に水を提供。

★家屋の被害にあった社員に無利息貸し出し。

S社が把握している現地ニーズとしては次のようなもの。

★テント

★単一乾電池（懐中電灯用）

★住宅

ただし、決して物資を送るなという情報もある。後に訪れたO社にも張り紙があった。

同 14:00

V会のW会長及びX氏（幹事）の出迎えを受ける。Nikko Hotelにてお二人に訪問目的などを説明する。

同　16:20　W会長の案内で台中市政府訪問（市長秘書Y氏と面談）

小学校と中学校が1校ずつ壊れた。

学校周辺を復興（住宅）の中心にしたい

今は、建物の問題が一番大きい。専門家が欲しい。テントではもたない。

ボランティアの必要性は感じない。

特殊技術をもった人だけが必要。

建物危険度判定の技術が必要（そのほかの援助は、してもらうのが悪いという感じ）。

ボランティアは、今日から、連合部門が1階入り口で受け付けている。物資の配給・罹災証明

台中市ではビルの倒壊は210棟（南投では低い建物がつぶれている）。

台中市では、9000戸が全壊。

統計は、今日できたばかりの資料（市民配布用とアップデート版）を参照。

死者に対しては見舞い金を支給した。

融資を始めた：200万NT＄利子3%・150万NT＄無利子・家30%ディスカウント。

技術的・自然科学的な情報は、消防のセンターが扱っている。

台中市政府として今やっていることは、現金を配るだけなので、今後の復興に向けて行政としての手順など助言が欲しいとことであった。そこで、阪神・淡路大震災を体験し、復興に関してのノウハウをもっている兵庫県の行政チームが台湾に入っていることを知らせた。(20：25兵庫県行政チーム幹部に電話し、このようなニーズがあることを伝えるとともに、21：35台中市政府のY氏にも‘兵庫県行政チームには連絡している’旨を告げた)

同　18:00

W会長の案内でO社台中市支會訪問

一般の南投縣入りが難しいのは、総統により「非常事態宣言」が発令されたので、できるだけ外部から人を入れないようにしているからとのことだった。ただ、実際は、通行制限はないとのこと（団体Zからの情報）。非常事態宣言は、外国人労働者などが引き起こしているとされる“不穏な動き”（？）への防御処置とのこと（W氏らの説明）。南投縣に入るには、公式には何らかの身分証明が必要。

同　19:00　V会のメンバーと面談

台中は観光ができる。昨日から電気も来ている。水もある。

余震は昨日14：00にM4.5が1回あっただけ。

非常事態宣言は、過去に2回出ている。大きな台風の時と、蒋介石の子息が亡くなった時。前者は、自然災害。後者は、大陸への懸念。今回は、外国人労働者問題。実際、この非常事態宣言で助かっているとWさんは考えている。

同 22:15　日本のNPOの1つ団体Zの皆さんに会いに行く（人名省略）。

団体Zのこれまでの対応とニーズを詳細に尋ねた（ここでは省略）。

9月30日　6：30　南投縣に向けて出発

総合体育場で概要把握できるだけ多くの避難所等をまわり、被災者の声を聞く

台中にもどり、団体Z、団体AAとの打ち合わせ

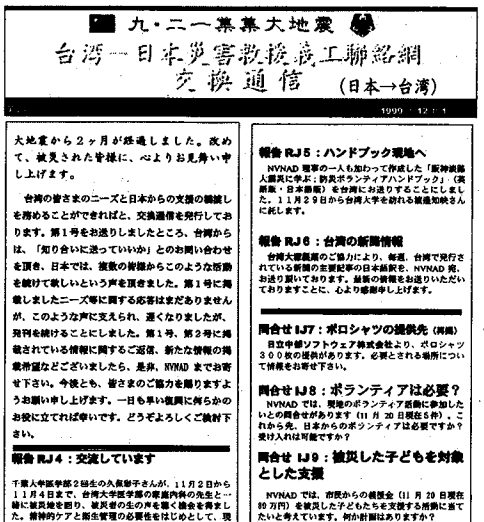
9月30日には、総合体育場で出会った現地の人々と一緒に南投の山中を行くことになった。次の風景は、この時に体験したものである。

写真6：被災者から話を聴く

> 山間部の被災地を訪れると、山が四方から崩れ、谷底にあった家々が莫大な量の土砂に埋まっている地域があった。絶望的な救出作業が行われている傍(かたわら)に佇(たたず)む女性がいた。都会の大学に通っているが、両親の住む実家が埋まったと聞いて駆けつけたという。お会いしたとき、ちょうどご両親の衣服の一部が見つかったとの連絡が入った。一緒に作業を見守る自分に、どういった言葉がかけられたであろうか。ただただ、涙をこらえて、傍(そば)にいるしかなかった。しばらくして、こちらの手を堅く握ってくれた（渥美,2001、p.58-59）。

第2次隊の報告を受けたNVNADでは、今後の支援活動を巡って議論が重ねられた。現地では、団体Bなどの組織だったボランティア活動が継続しているので、日本からの一般的な（特殊な能力を持たない）ボランティアに対するニーズはほとんどないと判断した。しかし、大きな被害を受けた山中の村々には、悲しみに耐える人々の姿があった。台湾の企業や業界団体は支援を展開しようとしていた。こうした状況把握の中で、NVNADとしては、支援物資の大規模な提供や多数のボランティアの訪問は必要ではなく、むしろ、被災地の個別ニーズと日本の様々な援助資源との連絡を地道に展開していくことを決定した。具体的には、「九・二一集集大地震　台湾-日本災害救援義工聯絡網 交換通信（以下、交換通信）」を発行することにした。

交換通信は、1999年10月19日発行の創刊号から、約2ヶ月に1回の割合で発行し、2000年1月17日に第3号を発行した。配布先は、2回の現地訪問で知り合った台湾の人々とNVNADと既に何らかの関係のあった日本の諸機関、および、今回の震災でNVNADに情報を提供して下さった方々であった。交換通信は、2ページで構成され、第1ページには、日本側から台湾に提供できる事柄や、報告、そして、問い合わせが並んでいる。第2ページには、第1ページの問い合わせに対応した空欄が設けられ、台湾から日本への回答が書き込めるようになっている。両ページはまず日本語で作成し、台湾の言葉に翻訳してくださるボランティアにお願いして全文翻訳してもらい、日本には日本語で、台湾には現地の言葉で発行した。また、NVNADのホームページでも公開した。実際には、台湾からの回答は、ほとんどなかったが、若干の電子メールのやり取りがあり、その1つから震災1年後の訪問が実現した。



九・二一集集大地震

台湾－日本災害救援義工聯絡網

交換通信　（日本→台湾）

1999・12・1

大地震から２ヶ月が経過しました。改めて、被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

台湾の皆さまのニーズと日本からの支援の継続しを務めることができればと、交換通信を発行しております。第１号をお送りしましたところ、台湾からは、「知り合いに送っていいか」とのお問い合わせを頂き、日本では、複数の皆様からこのような活動を続けて欲しいという声を頂きました。第１号に掲載しましたニーズ等に関する応答はまだありませんが、このような声に支えられ、遅くなりましたが、発刊を続けることにしました。第１号、第２号に掲載されている情報に関するご返信、新たな情報の掲載希望などございましたら、是非、NVNAD までお寄せ下さい。今後とも、皆さまのご協力を願いますようお願い申し上げます。一日も早い復興に何らかのお役に立てれば幸いです。どうぞよろしくご検討下さい。

報告 RJ4：交流しています

千葉大学医学部２回生の久保卓子さんが、11月２日から11月４日まで、台湾大学医学部の草屯内科の先生と一緒に被災地を回り、被災者の生の声を聞く機会を得ました。精神的ケアと衛生管理の必要性を はじめとして、現地の最新情報をまとめて下さいました。詳細なレポートが作成されています。続いて、東京大学医学部大学院生（元日本赤十字社看護師）宮道知映さんも11月29日より現地に入り、活動を継続します。

編集・発行：日本災害救援ボランティアネットワーク
Nippon Volunteer Network Active in Disaster (NVNAD)

代表者：田中敏昭 (Toshiaki Tanaka)

住所：〒663-8114 兵庫県西宮市上甲子園 5-1-1

TEL:81-798-36-9900
FAX:81-798-36-4392
e mail:t-noshi@hi-ho.ne.jp
Web: http://apollo.m.ehime-u.ac.jp/~nvnad

報告 RJ5：ハンドブック現地へ

NVNAD 現事の一人も加わって作成した「阪神淡路大震災に学ぶ：防災ボランティアハンドブック」（英新版・日本語版）を台湾にお送りすることにしました。11月29日から台湾大学を訪れる被災知映さんに託します。

報告 RJ6：台湾の新聞情報

台湾大使館様のご協力により、毎週、台湾で発行されている新聞の主要記事の日本語訳を、NVNAD 宛、お送り頂いております。貴重な情報をお送りいただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

問合せ IJ7：ポロシャツの提供先（再掲）

日立中部ソフトウェア株式会社より、ポロシャツ３００枚の提供があります。必要とされる場所について情報をお寄せ下さい。

問合せ IJ8：ボランティアは必要？

NVNAD では、現地のボランティア活動に参加したいとの問合せがあります（11月20日現在５件）。これから先、日本からのボランティアは必要ですか？受け入れは可能ですか？

問合せ IJ9：被災した子どもを対象とした支援

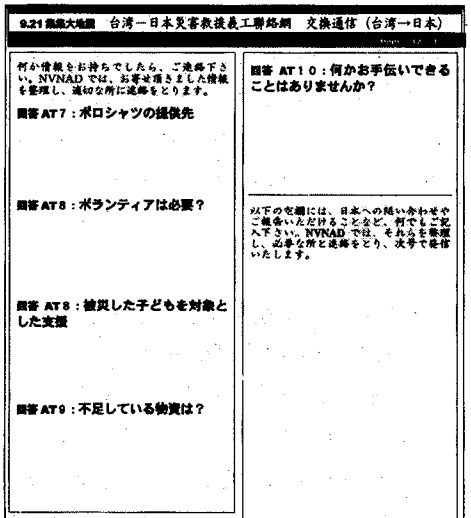
NVNAD では、市民からの義援金（1）月20日現在80万円）を被災した子どもたちを支援する活動に当てたいと考えています。何か計画はありますか？

問合せ IJ10：何かお手伝いできることはありませんか？

被災地のお役に立てることは、他に何かないでしょうか？ NVNAD でできることは、できるだけさせていただきます。NVNAD だけでは解決できないときは、他の団体等に呼びかけます。情報をお寄せ下さい。

NVNAD では、日本からの救援を考えている人々が知っておくべき現地情報を求めています。参考になりそうな情報をお送り頂ければ幸いです。

9.21 集集大地震　台湾－日本災害救援義工聯絡網　交換通信　第２号



9.21 集集大地震　台湾－日本災害救援義工聯絡網　交換通信（台湾→日本）

何か情報をお持ちでしたら、ご連絡下さい。NVNAD では、お寄せ頂きました情報を整理し、適切な所に連絡をとります。

回答 AT7：ポロシャツの提供先

回答 AT8：ボランティアは必要？

回答 AT8：被災した子どもを対象とした支援

回答 AT9：不足している物資は？

回答 AT10：何かお手伝いできることはありませんか？

以下の空欄には、日本への願い かわせやご報告いただけることなど、何でもご記入下さい。NVNAD では、それらを整理し、必要な所と連絡をとり、次号で発信いたします。

ご記入いただきました方についてお伺い下さい。

ご氏名：

ご所属：

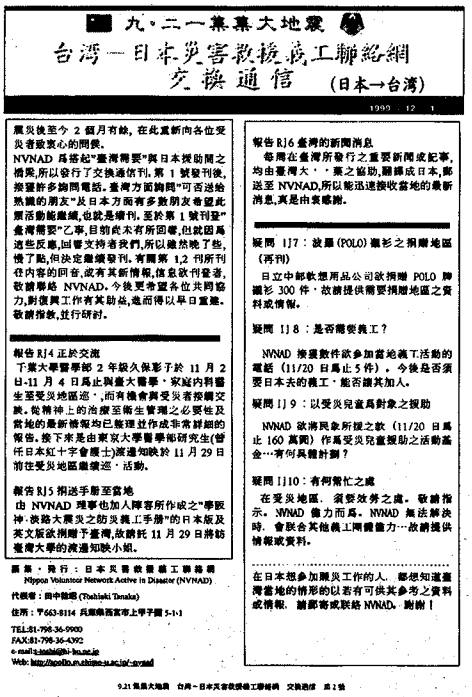
住所：

TEL:
FAX:
e-mail:
web:

このページのみご返送下さい。なお、書き切れない場合は、裏に入りますが、簡潔にご記入いただき、ご返送下さい。

9.21 集集大地震　台湾－日本災害救援義工聯絡網　交換通信　第２号

資料１　交換通信第２号（日本語版）



九・二一集集大地震

台湾－日本災害救援義工聯絡網

交換通信　（日本→台湾）

1999・12・1

震災後至今２個月有餘，在此重新向各位受災者致衷心的問候。
NVNAD 爲答応"臺灣需要"與日本提助間之橋梁，所以發行了交換通信刊，第１號發刊後，接受許多詢問電話。臺灣方面詢問"可否送給熟識的朋友"及日本方面有多數朋友希望此類活動能繼續，也就是續刊，至於第１號刊登"臺灣需要"乙事，目前尚未有所回覆，但就因爲這些反應，回響支持者我們，所以無然晚了些，慢了點，但決定繼續發刊，有關第 1,2 刊所刊在內容的回答，或者其新情報，信息欲刊登者，敬請寄給 NVNAD。今後更希望各位共同協力，則復興工作有其助益，進而得以早日重建。敬請指教，並行研討。

報告 RJ4 正於交流

千葉大學醫學部２年級久保彩子於 11 月 2 日-11 月 4 日爲止與臺大醫學・家庭內科醫生至受災地區巡・，而有機會與受災者接觸交談。從精神上的治療至衛生管理之必要性及當地的最新情報均已整理並作成非常詳細的報告。接下來是由東京大學醫學部研究生(曾任日本紅十字會護士)渡邊知映於 11 月 29 日前往受災地區繼續巡・活動。

報告 RJ5 捐送手册至當地

由 NVNAD 理事也加入障害所作成之"學阪神・淡路大震災之防災義工手册"的日本版及英文版欲捐贈予臺灣，故請托 11 月 29 日將訪臺灣大學的渡邊知映小姐。

編集・発行：日本災害救援義工聯絡網
Nippon Volunteer Network Active in Disaster (NVNAD)

代表者：田中敏昭 (Toshiaki Tanaka)

住所：〒663-8114 兵庫県西宮市上甲子園 5-1-1

TEL:81-798-36-9900
FAX:81-798-36-4392
e-mail:t-noshi@hi-ho.ne.jp
Web: http://apollo.m.ehime-u.ac.jp/~nvnad

報告 RJ6 臺灣的新聞消息

每周在臺灣所發行之重要新聞或記事，均由臺灣大・・藉之協助，翻譯成日本，郵送至 NVNAD,所以能迅速接收當地的最新消息,真是由衷感謝。

疑問 IJ7：波羅(POLO)襯衫之捐贈地區（再刊）

日立中部軟想用品公司欲捐贈 POLO 牌襯衫 300 件・故請提供需要捐贈地區之資料或情報。

疑問 IJ8：是否需要義工？

NVNAD 接受數件欲參加當地義工活動的電話（11/20 目馬止 5 件），今後是否須要日本去的義工・能否讓其加人。

疑問 IJ9：以受災兒童爲對象之援助

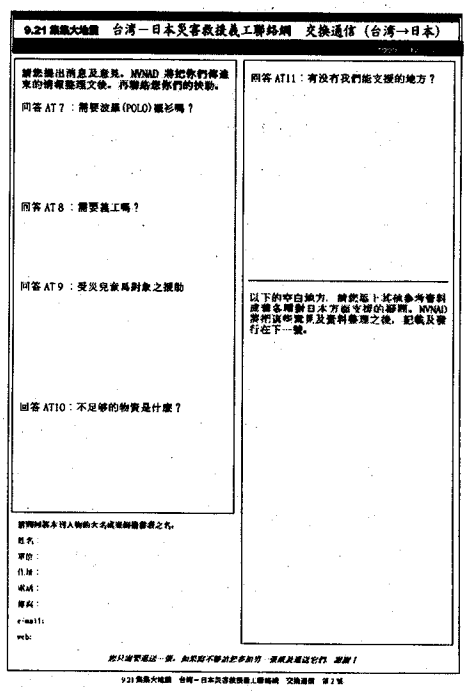
NVNAD 欲將民象所捐之款（11/20 目馬止 160 萬圓）作爲受災兒童援助之活動基金…有何具體計劃？

疑問 IJ10：有何幫忙之處

在受災地區，須要效勞之處。敬請指示。NVNAD 盡力而爲。NVNAD 無法解決時，會联合其他義工團體盡力…故請提供情報或資料。

在日本想參加興災工作的人，都想知道臺灣當地的情形的以若有可供其參考之資料或情報，請都寄或联絡 NVNAD，謝謝！

9.21 集集大地震　台湾－日本災害救援義工聯絡網　交換通信　第２號



9.21 集集大地震　台湾－日本災害救援義工聯絡網　交換通信（台湾→日本）

請您提出消息及意見。NVNAD 將把你們傳達東的情報整理文後，再聯絡您你們的快助。

回答 AT7：需要波羅(POLO)襯衫嗎？

回答 AT8：需要義工嗎？

回答 AT9：受災兒童爲對象之援助

回答 AT10：不足够的物資是什麼？

回答 AT11：有沒有我們能支援的地方？

以下的空白地方，請您寫上其他參考資料或需各種對日本方面有利的報刊。NVNAD 將將該部資料及資料整理之後，記載及發行在下一號。

請問回答方得人物的大名或團體名稱之名。
姓名：
單位：
住址：
電話：
傳真：
e-mail:
web:

您只需要寄這一張，如果您不要寄此多新刊，請原封寄還它們，謝謝！

9.21 集集大地震　台湾－日本災害救援義工聯絡網　交換通信　第２號

資料２　交換通信第２号（現地語版）

第3節　震災から1年：第3次隊（2000年9月16日～19日）

2000年7月13日、1通の電子メールが届いた。震災直後の10月から発行してきた「交換通信」をインターネットで見た、震源地に近い南投縣団体BBからであった。以後、頻繁にメールでのやり取りが続いたのち、団体BBを通じて被災した子どもたちや生活苦に悩む家庭を支援することになり、震災1年を目前に控えた9月16日から19日、現状把握と先方との意思疎通を図ることを目的に第3次隊を派遣した。

第3次隊に参加した時のフィールドノーツ

【台湾】第3次隊派遣報告

9月16日夜、南投縣の中心部である草屯鎮に着き、翌朝に町中を見てまわった。前回、震災直後に訪れたときと違い、中心街の道路や商店などは見事に復興していたが、歩道の状態やビルの合間に空き地が目立つなど、被災を感じさせるところがまだ数多く残っていた。団体Bが建設した仮設住宅が近くにあり訪ねてみたが、「阪神」ではじゃりみちだったプレハブの周りが、アスファルトやブロック敷きできれいに整備され、緑も多く植えられていて、住環境にも配慮されていることがうかがえた。ただし、公的に建てられたところは、そうでもないという。

この日は、昼前に南投縣団体BBを訪問、CC總幹事から団体BBによる支援活動の説明を頂いた。本来の団体BB館のとなりに「草屯鎮社區家庭支援中心（草屯鎮コミュニティ家庭支援センター）」があり、1階は事務所、上の階は学童保育の託児室になっている。幼児のための託児センターは、ここからほど近いところにある草屯基督長老教會の建物を借りて行われている。翌日は活動の現場となる託児センターや家庭支援センターのケースとなる家庭をお訪ねした。

【震災児童託育中心（託児センター）】

南投縣団体BBでは、震災後まず10月11日に託児所の開設から始めた。3～4年の計画である。これは台北の団体DDから要請があったもので、阪神大震災の教訓として託児所が必要となることを知っていた。託児所の目的は、子どものことに関わっていられる時間が少なくなった大人を安心させることにあり「安親班」と呼ばれている。

基本的に無料で開いており、EE会から300万NT＄の助成を受けている。現在は2才児から5才児まで52人が通っている。託児の条件は、(1)被災者（被災者でなければ別の所を紹介：寄付金・義援金は被災者にあてられたものだから）、(2)両親が失業している、(3)中・低収入である、(4)家庭支援センターのケースとして扱っている人の子ども、(5)障害者を含む家庭、家庭内暴力のある家庭の子どもであるか遺児。条

写真7：震災児童託育中心（南投）

件に合わない場合、有料で預かることもある。団体BBとしては、短期間このようなサービスを行い、自立を促している。九份二山（震源地）から12～3人の子どもが来ているが、片道1時間を車で送迎している。

【草屯鎮社區家庭支援中心】

南投縣の委託事業として開設。縣内に23カ所あり、草屯には2カ所。

基本的なサービスは、

1. 情報の提供・紹介（義援金・就職口など）
2. 個々のケース支援・専門機関の紹介
3. 在宅者支援：家事支援・通院補助・リハビリ
4. コミュニティワーク：緑化・美化の推進

であり、団体BBでは他に(1)学童保育(約60人)、(2)遺児ケア(35人)、(3)高齢者支援(電話での声かけや祭りの時のお菓子配布)、(4)昼食のサービス(12人分)などを行っている。

財源は、会館の維持費とスタッフの給料（3名分）が縣から出るが、活動費のための直接経費や支援物資の調達などは全て寄付で賄っている。(日本とは逆だなと思った。なおセンターのスタッフは6名おり、補助の出ない残り3名は団体BBから出している。)

また、失業対策として縣政府から出る一日542NT＄（約1920円）の臨時工作（アルバイト）料を受けて仕事の斡旋もしている。団体BBでは40名分を希望しているが、現在のところ20名しか実現していていない。給与ベースは通常の800～1000NT＄に比べて低く、応募者は女性が多い。応募はたくさんあるが、その中で必要度の高いケース（失業中の女性で仕事がないと夫から暴力を受ける人とか、失業のため自殺未遂をした30才の男性など）を優先している。

現在、縣の最大の懸案事項は、自殺者の増大、失業による不安の増大である。自殺者はすでに40人を数え、未遂はさらに60人になる。この16日にも未遂があった。自殺者は男ばかりで、失業がその原因と思われる。団体BBでは、「高危険群個案資料集（自殺・受暴)」というファイルを作り、自殺の心配のあるケースを追っている。受暴とは、家庭内暴力で、主として夫から妻への暴力。これも失業が絡んでいると思われる。

【ケース訪問】

2日目に、家庭支援センターがホームケアをしている2つの家庭へ、ご本人の了解の下お訪ねし、お話を伺った。そのうちの1つは、老夫婦と若夫婦と子供（幼児と1才くらい）の6人暮らし。自宅が全壊し、震災から4日後、隣接する公用地(川の上！)に自力でバラックを建てたという。当時、自宅の全・半壊者には2つの選択が与えられた。

1) 仮設に入る（期限は3年)。
2) 政府から家賃補助を受ける（月3000NT＄・1年分)。一括で支払われ、使途は家賃に限定されない。

この家族は、2)を選択し、自力でバラックを建てて補助は生活費にまわしたが、もと

いた土地は複数の所有者がいたため、権利関係についての政府による鑑定が出るまであと1年かかり、再建はその後になるそうだ。仮設住宅の3年間に比べ補助は1年間なので、不公平感があり不満を感じているが、仮設に移りたいと役所に申し出たら、家賃がいるといわれたという。主人の仕事は、工事現場の足場（竹製）を作ることだが、不況のため1ヶ月に10数日しか仕事がないそうだ。「阪神」の現状を聞かれ、仮設の完全解消が5年後であったこと、失業問題はいまだ続いていることを話すと、「日本でさえそうなのだから、ここでは…」と失望されていた。

その次に訪れた家は、病床の妻を抱え、自らも透析を受けているという高齢者の家庭であった。訪ねていくと最初は主人が留守だった。その日の訪問は既に知らせてあったので、中をのぞいてみるとカレンダーの裏に書かれた書き置きがあった。そこには・・・

「皆様今日は私は〇〇〇です。
昭和20年の時新兵教育を受た陸軍一等兵
部隊名〇〇〇隊一中隊一小隊員今も年76才
妻も七年異常の病氣毎日しんだいの上に。ねてゐます
今お金もないためたすけて下さませ
私はお金がないために自殺するつもり
皆様たすけておくれ多く病氣足もあるけなほど
〇〇の妻病氣　我も病氣にかかていきたくもない
今日も病院に洗腎にゐきました
11時半に回てくる
要事があってそと出た必五時ごろに回へてくる」

（表記はそのまま。固有名詞は〇で示した）

ご本人の帰宅を待って話をし、布団一式を手渡してその場をあとにした・・・

おわりに

本稿では、NVNADメンバーとして参加してきた台湾集集大地震への救援活動の経緯を当時のフィールドノーツをもとに振り返ってみた。フィールドノーツというエスノグラフィーや理論的考察の原材料を紹介するというのが目的の1つであった。原材料らしく、ゴツゴツとした手触りのままに提示しているのは、この目的のためである。ただし、様々な救援活動から台湾集集大地震の活動を選んだのは、この救援活動がNVNADの災害救援に質的な変化をもたらす契機となったからである。

NVNADは、1995年に阪神・淡路大震災の救援活動から結成された西宮ボランティアネットワークが発展的に解消して設立された組織である。NVNADは、震災はもとより、2年後の重油流出事故など、多くのボランティアが現地に入るという場面で、その調整を任務としてきた。任務としてはっきりとした自覚があったわけではなく、むしろ暗黙の内に、ボランティアを含む災害救援とは、現

地に駆けつける大量のボランティアの調整だと考えていた。しかし、台湾に赴き、組織だったボランティアの活動を目の前にし、彼我の体制のあまりの違いに驚くとともに、個々の被災者が抱く個別の悲しみに触れ、ボランティアとして災害救援活動に参加するとはどういうことかということを改めて深く考える機会となった。また、災害NPOとしてのNVNADも、何がなんでも被災地に駆けつけて、救援活動を開始することばかりが求められているのではなく、被災者の方々の一人一人の気持ちに深い配慮を示し、ボランティアとして関わってくださる人々ひとりひとりの思いを大切にしたプログラムを模索すべきであると考えるようになった。これは当然のことだとの指摘を受けるかもしれないが、1995年のあの阪神・淡路大震災の余韻から一歩離れて、こうした考えに至るには時間ときっかけが必要であった。1999年の台湾集集大地震は、NVNADの災害救援方針に質的な変化をもたらすきっかけになる災害であった。

謝　辞

台湾集集大地震の救援活動では、台中ロータリークラブ、台湾大塚製薬、多文化共生センター、南投YMCA、日本レスキュー協会、兵庫県をはじめ多くの方々に現地および日本でお世話になった。また1件1件名前を挙げることはできないが「交換通信」にも各方面からたくさんのご協力を頂いた。ここに記して深く感謝申し上げる次第です。またこうした活動が可能になった背景には、NVNAD会員からの情報提供とスタッフへの支援金の寄付、そして、ボランティアとして現地まで飛んで頂くなど多くのご尽力を頂戴したことを明記し、改めて感謝申し上げたい。

参考文献

渥美公秀　2001　*ボランティアの知－実践としてのボランティア研究*　大阪大学出版会

Emerson, R.M., Fretz, R. I., & Shaw, L.L. 1995 Writing ethnographic fieldnotes. University of Chicago Press : Chicago. (佐藤郁哉、好井裕明、山田富秋訳　方法としてのフィールドノート　新曜社, 1998)

佐藤郁哉　2002　フィールドワークの技法－問いを育てる、仮説をきたえる　新曜社

Fieldnotes of Disaster Relief for Taiwan Chi-Chi Earthquake

Tomohide ATSUMI
(Community Dynamics)

Abstract

Nippon Volunteer Network Active in Disaster (NVNAD) was promptly activated after the Taiwan Chi-Chi Earthquake on September 21, 1999. It dispatched a relief team three times — on the day of the quake, after a week, and an anniversary — to Taiwan. The author participated in every mission. The present study re-constructed the author's fieldnotes and introduced the actual relief activities by a disaster non-profit organization established after the Great Hanshin-Awaji Earthquake. The relief in Taiwan changed the NVNAD's activities in a qualitative way in that it paid more attention to each individual victim rather than providing coordination of volunteers to care the whole region.

Key words : Taiwan Chi-Chi Earthquake, Disaster Relief, Disaster NPO, Fieldnotes, Volunteer